

第3章 小田原市の歴史文化の特性

本市には、先史時代から現代に至るまで脈々と受け継がれてきた歴史文化が、市域にわたり残されています。時代とともに積み重なり、変化しながら現代に至る小田原市の歴史文化の特性を、四つに分類・整理しました。

歴史文化の特性 1

山野河海が生んだ多様な歴史文化

－自然の恵みとそれを活かす人々－

市域には、箱根に連なる山々、足柄平野と中央を流れる酒匂川、相模湾などからなる変化に富んだ地形があります。こうした自然環境を活かして人々は多様な歴史文化を重ねてきました。

市の西部には、箱根山の溶岩と火山碎屑物が形成した箱根外輪山と丘陵地が広がります。小田原城は、この箱根外輪山がつくり出した複雑な地形を巧みに利用して築城された城郭で、難攻不落の城郭として広く知られました。江戸時代になると、江戸城普請のための石材調達に応えるために、沿岸部を中心に諸大名による石丁場が各地に設けられました。こうした自然環境から生まれた小田原城や江戸城石垣石丁場跡などは、現在、箱根ジオパークのジオサイトとしてその価値を認められ、資源の保護保全が図られています。

中央の足柄平野を流れる酒匂川・森戸川などの河川は、弥生時代以降長い期間人々の生活を支えた肥沃な生産地を形成しました。久野諏訪ノ原丘陵に広がる古墳群は、足柄平野の生産力を背景に力を付けた権力者の墓です。また、東部を流れる中村川一帯は、平安時代後期から鎌倉時代にかけて勢力を伸ばした中村氏の本拠地となり、土肥氏・小早川氏などの一族の活動を支えました。

一方で、河川は災害の源でもあり、宝永4年（1707）に起きた富士山の宝永噴火をきっかけに河床が上がったことで酒匂川の洪水が多発するなど、人々の生活に負の影響も与えました。

また、日本三大深湾である相模湾に注ぐ河川は栄養豊富な水をもたらし、多種多様な魚介を育みました。海は人々の食を支え、羽根尾貝塚から出土した骨角製の釣針や木製の櫂などの漁撈具は人々の活動を示すとともに、出土したイシナギやイルカの骨、貝類などは豊かな食生活を物語っています。

海や山がもたらす恵みとなりわいは受け継がれており、漁業とその加工業や石材業等は現代も続く産業の一つです。市域西部沿岸部に伝承された鹿島踊は、石材運搬の航海安全や大漁を祈る呪芸とされ、「山王原大漁木遣唄」は漁業従事者の仕事唄として伝承されてきました。

自然は人々に脅威をもたらすこともあり、明治35年（1902）9月の低気圧の影響により小



小田原市遠景

田原を襲った大海嘯を記した絵巻や、大正12年（1923）9月に発生し甚大な被害をもたらした大正関東大地震の殉難碑や慰靈塔などは、自然とともに生きた小田原の人々の記憶を今に伝える文化財です。

こうして、山野河海とともに生きた人々の生活や文化は、歴史を重ねて磨かれ、現在に受け継がれています。

歴史文化の特性2

人や物の往来により生まれた歴史文化

—街道が育んだ人々の交流と発展—

交通上の難所である箱根山は、山越えをする人々をこの地に留めました。古くから東西交流の場であり、近代以降は鉄道の要衝地となりました。

縄文時代前期の羽根尾貝塚では、中部地方や東海地方の土器が出土し、弥生時代中期の中里遺跡では瀬戸内地方や畿内、東海・中部・北陸・東北地方の土器が出土しています。

古代東海道が整備されると、永塚・下曾我付近に相模国足下郡の郡家、千代に寺院が置かれました。郡家や寺院を中心に人々の交流は増え、国府津には港町、酒匂には宿が形成されました。13世紀になると、鎌倉と伊豆・熱海を結ぶ二所参詣を契機に街道・宿（宿場）町の整備が進みました。

15世紀には、現在の小田原市の中心部周辺に関所が置かれました。16世紀前半に戦国大名北条氏が小田原を本拠とし、領国を拡大すると、小田原は関東の首府として栄えました。北条氏は小田原を中心とした伝馬制度の充実を図りました。

北条氏が去ると、徳川家康は北条氏の伝馬制度を継承し、五街道を整備し宿駅制度を確立しました。箱根を経由し三島に至る箱根八里は近世東海道最大級の難所であり、東の起点にあたる小田原は、東海道屈指の宿場町として旅人や商人などで大変なにぎわいを見せました。小田原の伝統工芸や地場産業、水産加工品、和菓子などの名産品などは、小田原宿の繁栄とともに各地から訪れた人々によって全国に発信されました。

明治新政府により宿駅制度が撤廃されると、交通の要衝地としての役割を終え小田原の様相は一変しました。そこに画期をもたらしたのが、明治20年（1887）の横浜—国府津間の鉄道（後の東海道本線）開業でした。翌年国府津—湯本間に馬車鉄道が開通し、明治29年（1896）には熱海一小田原間に人車鉄道が開通しました。その後、馬車鉄道は明治33年（1900）に電気鉄道に、人車鉄道は明治41年（1908）に軽便鉄道に切り替わりました。

馬車鉄道の開業後、東京から至近で温暖な気候に恵まれた小田原は保養地として注目されました。海岸部には旅館などが開業すると共に、政財界人・軍人など様々な人々が国府津・



東海道小田原
(御上洛東海道)

第3章 小田原市の歴史文化の特性

小田原・板橋に居住・来訪するようになりました。清浦奎吾の皆春荘・田中光顯別邸・松永安左エ門の老樺荘などは、今にその名残を伝えています。また、彼らの多くは、この地で古美術収集や茶の湯に親しみ、相互に往来し、ここに「別邸文化」とよぶべき活動が行われました。

小田原駅が東海道本線に編入されたのは昭和9年（1934）で、現在も東海道新幹線の停車駅であるほか、小田急線、箱根登山電車、大雄山線が乗り入れ、国際的な観光地となった箱根の玄関口にもなっています。また、鴨宮駅は昭和39年（1964）に開業した新幹線が試験走行を行った発祥地として、石碑が設置されるなど顕彰されています。

こうして、時代を通じて交通の要衝であった小田原は、時代を代表する人物を輩出するとともに交流の舞台となり、その事績は現在に受け継がれています。

歴史文化の特性3

日本史を彩った人物が織り成した、重層的な歴史文化

－小田原を舞台とした歴史群像－

豊かな自然環境、東西交流の結節点という場、そして温暖な気候に恵まれた市域には、北条氏をはじめとした戦国大名、政財界人や文化人など多くの人々が居住、来訪しました。こうした人々の存在と活躍がつくった歴史があります。

平安時代、中村荘を本拠地とした中村氏一族は、西相模一帯に勢力を拡大しました。一族は早くから源頼朝に仕え、頼朝が平家方に惨敗した石橋山合戦でも中核をなしたといわれています。この合戦で源氏の先陣として戦い郎党の文三家康と共に討ち死にした佐奈田与一義忠は、美男の戦士として江戸時代の浮世絵等で人気を博しました。

また、建久4年（1193）、源頼朝の富士の巻狩りで決行された曾我兄弟（曾我十郎・五郎）の仇討ちは、日本三大仇討ち事件として有名です。これを題材に『曾我物語』がつくられ、後世「曾我物」として浄瑠璃・歌舞伎などで演じられました。更に、西大友・東大友は、後に九州の戦国大名として活躍する大友氏が鎌倉時代に本拠とした場所です。

16世紀初頭、北条氏綱が小田原城を居城とし、小田原は戦国大名北条氏の本拠となりました。早雲・氏綱・氏康・氏政・氏直と続いた北条氏は、その印判状に用いた印文「禄寿応穏」の如く、平和な世の構築に努めました。天文14年（1545）には連歌師宗牧そうばくも小田原を訪れました。永禄年間には上杉謙信や武田信玄が攻めこみましたが、北条氏はこれを退けました。

天正18年（1590）に豊臣秀吉が小田原攻めを開始すると、徳川家康・細川忠興など20万人ともいわれる軍勢が小田原城を囲み、秀吉は石垣山を築城しました。茶人千利休もこの合戦に際し小田原を訪れました。



石橋山合戦
佐奈田与一の図

江戸時代、小田原城は江戸防衛の重要な拠点として、大久保氏・阿部氏・稻葉氏などの徳川家譜代の大名が封じられました。稻葉正勝の母、春日局は3代将軍家光の乳母として知られています。

文政4年（1821）、大久保忠真は柏山村の農民二宮尊徳（通称金次郎）に大久保家の分家の宇津家が治める下野国桜町領の復興を命じました。尊徳の教えは、明治時代になっても継承され、二宮尊徳生家や二宮尊徳関係資料は文化財に指定されています。

明治23年（1890）の伊藤博文の別邸滄浪閣の建設を契機に、政財界人・軍人らが次々と別邸を構えました。内閣総理大臣を務めた山縣有朋・清浦奎吾・大隈重信はそれぞれ古稀庵・皆春荘・国府津別邸を造営し、近代小田原三茶人と称される三井の大番頭で古美術収集家として知られた益田孝（鈍翁）は掃雲台を、戦後九電力体制の構築に尽力した松永安左エ門（耳庵）は老樺荘を、三越の社長などを歴任した野崎廣太（幻庵）は葉雨庵を造営しました。

江戸時代に武家屋敷が並んだ南町の西海子小路には、明治時代には多くの著名人が居住、あるいは別邸を構えました。周辺には昭和時代にかけて、斎藤緑雨、小杉天外、村井弦斎、谷崎潤一郎、北原白秋、三好達治、岸田國士など多くの文学者が居住し、互いに交流しました。

こうして、日本史上を彩った様々な人物の痕跡は、小田原の知名度を高め、その一部は観光資源として、現在に受け継がれています。

歴史文化の特性4

日々の人々の生活により育まれた、今につながる歴史文化

—人々のくらしと産業—

山野河海を持つ市域では、豊かな自然を生かしたなりわいが営まれてきました。宿場町でもあった城下町には数多くの職人や商人が集住し、水産加工品や漆器など小田原を代表する多くの伝統産業が生み出されました。

酒匂川を中心に広がる足柄平野の農業、相模湾の沿岸部の漁業、箱根山地を中心とした山間部の林業など、現在に至るまで山野河海の地形と自然環境を活かした多様な生産活動が営まれてきました。市域西部の丘陵地の南向きの斜面の柑橘類栽培、市域東部での梅の栽培は、特筆すべき第一次産業です。

蒲鉾や塩干などの水産加工品、梅を加工した梅干し、豊富な森林資源を材にした漆器・木象嵌・組木・小田原提灯といった木材加工品、さらに石材業や鋳物産業なども発展し、匠の技が継承され、「ういろう」を筆頭に、蒲鉾店、梅干し店、薬屋、石材店など今に続く店舗も数多く、市内産業の歴史と層の厚さを物語っています。

農林水産業・工業・商業と様々な産業が育まれる中で、多種多様な民俗文化が市域に根付きました。民間信仰も庶民に拡大し、これに伴う多くの石造物も造立されました。

江戸時代、東海道の宿場町としての発展に伴う街道を通じた文化の交流は、関西から小竹地区に「相模人形芝居」をもたらし、江戸の葛西囃子から派生した関東祭囃子が多古を始め

第3章 小田原市の歴史文化の特性

とする各地に「小田原囃子」として定着、横浜地方から曾我別所に伝わった獅子舞が「寿獅子舞」として継承され、「寺山神社の鹿島踊」や「山王原大漁木遣唄」、「小田原ちようちん踊り」、「栢山田植歌」などとともに地域の祭礼行事で披露され、今も小田原の民俗芸能として親しまれています。

また、小船の白髭神社では毎年1月7日にその年の五穀豊穣の吉凶を占う奉射祭が行われ、飯泉觀音として知られる勝福寺では、12月17日と18日に関東で最も早いだるま市が開かれ、商売繁盛や家内安全を願う人々でぎわいます。板橋のお地蔵さんとして親しまれている宗福院（板橋地蔵尊）では、1月と8月の23日と24日に大祭が行われ、参詣すると亡くなった身内と瓜二つの人に会えるといわれています。佐奈田与一義忠を祀る佐奈田靈社では、咳や声に靈験があるとされる、「佐奈田飴」がよく知られています。

更に、江戸時代の消防活動に由来する古式消防の伝統が継承され、消防出初式などで鳶職木遣、纏振り、階子乗りが披露されるなど、古くからの技を目にする機会に恵まれています。こうして、自然が生み出した自然地形、交通の要衝地による人々の往来、そして歴史の転換点に関わった人物の来訪による重層的な歴史は、文化、産業、観光などとして現在に受け継がれています。



寺山神社の鹿島踊



市域の鳥瞰イメージ図